記者発表資料

平成２９年１２月１２日
東 北 地 方 整 備 局

東北生態系ネットワーク推進協議会を設立

～川から流域に展開する新たな地域づくりの推進～

東北には個性に富む一級水系とラムサール条約湿地をはじめとする豊かな水辺環境は、地域の産業を支えるとともに、ガン類やハクチョウ類等、渡り鳥の中継地や越冬地として国内有数の拠点となっています。

東北地方整備局では、行政区域を超えた広域な生息域をもつこれらの大型水鳥類の生息環境を生態系ネットワークとして保全し、さらに地域の価値と魅力の発見・向上につなげるために、広域的に多様な主体が連携する「東北生態系ネットワーク推進協議会」を設置し、第１回の協議会を以下のとおり開催することといたしましたのでお知らせします。

１．開催日時 ： 平成２９年１２月１４日（木） １３：００～１５：００

２．開催場所 ： ＴＫＰガーデンシティ仙台勾当台 ホール１
宮城県仙台市青葉区国分町3丁目6番1号 仙台パークビル2階

３．議　　事 ： （１）河川を軸とする生態系ネットワークについて
～国内の取組状況と東北におけるこれまでの検討経緯

（２）話題提供
～大型水鳥類から見た東北の自然環境の保全と持続可能な利用（仮題）

（３）意見交換

（４）東北における取り組みと今後の進め方

４．会議の公開及び一般傍聴について
・会議は、原則として公開とします。
・報道関係者の席を用意しております。一般の方で会議の傍聴を希望される方は、会場の都合により数に限りがありますので先着順とさせていただきます。

（添付資料）
別紙-1　会場位置図
別紙-2　設立趣旨
別紙-3　委員名簿
別紙-4　生態系ネットワークの取り組み（案）

〈お知らせ先：宮城県政記者会、東北電力記者会、東北専門記者会、青森県政記者会
岩手県政記者クラブ、秋田県政記者会、山形県政記者クラブ、福島県政記者クラブ〉

＜問い合わせ先＞
国土交通省 東北地方整備局　仙台市青葉区本町 3-3-1 仙台合同庁舎 B 棟 12 階
電話（代）022-225-2171　FAX 022-215-3754
河川部 河川環境課 課　長　平山（ひらやま） 孝信（たかのぶ）（内線 3651）
課長補佐　八木（やぎ） 恵里（えり）（内線 3652）

別紙－1

第１回 東北生態系ネットワーク推進協議会会場位置図

［日時］日時：平成２９年１２月１４日（木）１３：００～１５：００

［場所］ＴＫＰガーデンシティ仙台勾当台 ホール１
仙台市青葉区国分町３丁目６番１号　仙台パークビル２階

［交通］仙台駅から仙台市営地下鉄**南北線**に乗車、２駅目の「勾当台公園（こうとうだいこうえん）駅」で下車
勾当台公園駅の**北１番出口**より徒歩約１分

※会場には駐車場がありませんので、公共交通機関または近隣の有料駐車場等をご利用願います。

▼仙台市営地下鉄「勾当台公園駅」から会場までの経路



別紙－2

東北生態系ネットワーク推進協議会
設立趣旨（案）

東北には個性に富む 12 水系の一級河川が流れ、その流域の多くの湖沼やため池などの水辺は、東北でなじみのあるガン類やハクチョウ類など、広域の水辺を行き来する大型水鳥類の中継地や越冬地等となっており、中にはラムサール条約湿地に登録された国際的に重要な地域も含まれているなど、豊かな自然環境が維持されています。

その一方で、国内最大のガン類の越冬地を形成している宮城県の県北地域等では、飛来した個体が過密状態にあることによる問題も懸念されています。さらに、より広域の生態系ネットワーク形成の視点からは、東北への飛来が近年相次いでいるコウノトリが安定して生息できる環境整備や、タンチョウの分散行動計画に基づく東北への越冬地の拡大なども課題となっています。また、東北の宝とも言えるこれらの生きものや豊かな自然環境は、身近で当たり前の存在としてその価値や魅力を地域内外に十分に発信できていない面もあります。

こうした課題への対応には、広域の視点が重要であり、その推進力となる様々な主体による広域連携・協働が欠かせません。近年、国土形成計画等の行政計画に基づき、持続可能な国土形成に資する取組みとして生態系ネットワークの推進が掲げられ、生態系の広域的なつながりを示す大型水鳥類等を指標とした水辺環境の保全・再生や、その成果を活かした観光や農業等の地域振興の取組みが、全国各地で多様な主体の連携により進められています。

東北は全国規模の生態系ネットワーク形成の視点からも重要な役割を担うことから、今回、行政区域や分野を超えて多様な主体が広域で連携・協働する場として『東北生態系ネットワーク推進協議会』を設立し、東北全域を対象とした生態系ネットワーク形成に取り組むこととといたしました。多くの人々の共感を得るための取り組みのシンボルとしては、東北の自然の豊かさを象徴する大型水鳥類等の生きものを掲げ、河川を軸とする豊かで健全な生態系による自然の恵みや価値に気付き、観光資源等として地域振興に持続的に活用することで、東北が潜在的に有する魅力の再発見やブランド力向上を図っていきます。

平成 29 年 12 月 14 日

別紙－3

東北生態系ネットワーク推進協議会　委員名簿

（敬称略）

	氏名等 ※順不同	所属・役職
有識者	東 信行	弘前大学 農学生命科学部　教授
	呉地 正行	日本雁を保護する会 会長
	佐々木 幹夫	八戸工業大学大学院 工学研究科 教授
	平山 健一	岩手大学名誉教授
	宮原 育子	宮城学院女子大学　現代ビジネス学部長
連携自治体首長	福島 弘芳	青森県つがる市 市長
	伊藤 康志	宮城県大崎市 市長
関係機関、企業等	渥美 雅裕	一般社団法人 東北地域づくり協会 理事長
	小野 晋	一般社団法人 東北経済連合会 常務理事
	久保 達也	一般社団法人 日本自動車連盟　東北本部　会員部 部長
	紺野 純一	一般社団法人 東北観光推進機構 専務理事 推進本部長
	今野 俊宏	株式会社 河北新報社 編集局長
関係行政機関	髙居 和弘	農林水産省　東北農政局　農村振興部　部長
	小沢 晴司	環境省　東北地方環境事務所　所長
	高村 裕平	国土交通省　東北地方整備局　河川部　部長

東北における河川を基軸とする生態系ネットワークの取り組み（案）

別紙－4

1. 水辺の状況

現状

指標種（大型水鳥類）が主要水系の流域に飛来

［**マガン**］ 宮城県の県北地域は国内最大の越冬地



蕪栗沼（大崎市、登米市）



伊豆沼の周辺（栗原市）

※平成28年度に国内に飛来したマガンの9割（約 17 万羽）を宮城県内で確認

［**コウノトリ**］各水系に散発的に飛来

［**タンチョウ**］日本海側の水系を中心に散発的に飛来

環境保全上のニーズ

指標種の生息環境の保全

・東北6県の湿地面積は**過去 100 年間で平均 55%減少**
※宮城県は 92%減少、青森県は 85%減少
出典：国土地理院（1999 年）湖沼湿原調査

・過密状態にある渡り鳥の越冬地
※国内に飛来するマガンの**9割が宮城県の県北地域に集中**

［**マガン**］ 新たな生息環境の創出による越冬地の分散

［**コウノトリ**］ 飛来個体の定着・繁殖に向けた生息環境の改善
※「コウノトリ野生復帰グランドデザイン」（兵庫県）との連携による兵庫県内への繁殖個体群の形成

［**タンチョウ**］ 過密状態にある北海道道東の地域個体群の分散
※「タンチョウ生息地分散行動計画」（環境省）に基づく北海道内の取組みとの連携

2. 地域資源等の状況

現状

地域に魅力ある資源が眠っている

・豊かな自然や景観が身近に存在するが、存在や魅力が知られていない資源も多く存在。

流域のニーズ

埋もれている資源の掘り起こし

・「東北の魅力」発信による国内外への認知度向上。
※東北6県のインバウンドは国内全体の約**2%**にとどまる。

・広域に点在する地域資源を活かす観光ルートが未開拓。
※点在する資源をつなぐ観光ルートの軸となる「川」の活用

渡り鳥の大群が見られる水辺



夜明けと共にガン類の大群が一斉に飛び立つ光景（蕪栗沼）

時折飛来する大型水鳥類



毎年のように東北に飛来するコウノトリ
※大型水鳥類は存在そのものがニュース性をもつ。写真は 2014 年5月に登米市に飛来したコウノトリ。

北上川を 200km 遡上するサケ





市街地を流れる川でサケの産卵が観察できる（盛岡市の中津川）

昔話に登場する風景（日本のふるさとの原風景）が各地に残る









自然に寄り添う農村の暮らしやたたずまいを身近に見られる

東日本大震災からの復興途上にある

・沿岸部の自治体は復興の途上にある。2020 年に復興・創生期間の目標年次を迎え、震災復興事業が区切りを迎える。

震災復興から自立した地域づくりへの転換

・人口の減少・高齢化への対応に加えて、復興後の東北圏の将来像を見据えた地域づくりが間もなく始まる。

河川を基軸とする生態系ネットワークの形成

下記の取組の考え方、取組方策を「**基本計画**（東北6県を対象）」、「**行動計画**（モデル地域を対象）」として取りまとめ

生態系ネットワークの基盤となる良好な水辺の保全

―良好な水辺を象徴する大型水鳥水鳥類から見た水辺整備の例―

［**マガン**］ねぐらの創出（遊水地や調節池の整備にあわせて湛水湿地を創出）

［**コウノトリ**］採食環境（河川区域、ため池等における浅い湿地の創出）、営巣環境（人工巣塔の設置など）の整備

［**タンチョウ**］採食環境・ねぐらの創出（河川区域への結氷しない浅い水域の創出）

＋

地域資源の掘り起こし

・地域に埋もれている川と関わりのある資源（自然、風景、文化、食など）の掘り起こし。

・上記資源と連携可能な地域の取組み・行政施策の整理。

河川からのアプローチが有効な理由

・河川は水源から河口にかけて連続する様々な土地利用をつなぐ軸。

・流域は生態系ネットワーク形成や多様な主体・分野との連携等を把握する単位として分かりやすい。

・河川管理者は、社会資本整備を通じて、生態系ネットワークの基盤となる良好な河川環境の保全・創出を担う事業官庁として実効性ある取組みの推進が可能。

良好な水辺を活かした地域の魅力・価値の向上

・良好な水辺と地域資源との組み合わせにより、相互の魅力や価値を高める取組みの試行。

良好な水辺を活かした地域振興の例



修学旅行、インバウンド向けのエコツアー等の新たな目的地・立ち寄り地に



生きものと共生する良好な水辺が商品の付加価値に

川から流域に展開する新たな地域づくりの推進

地域のニーズや課題に対応した河川整備のモデルづくり（河川を軸とするWIN-WIN-WINの地域活性）